

No.	学科	必要	理由	方法
第1課	正確な朗読	紙面にあるものをそとおり声に出して読む。語を飛ばしたり、語の一部を抜かしたり、読み違えたりしてはなら	注意深く、正しく朗読することは、聖書の真理の正確な知識を伝えるうえでの基本。	練習し、練習し、練習する。実際に声に出して行なう。だれかに朗読を聴いてもらい、間違いを指摘するように頼む。個人研究をする時、注意深く読むより自分を訓練する。単に語を読むのではなく、語群を読むことを習得する。
第2課	言葉をはっきり述べる	言葉は、聴衆が容易に理解できるように述べる。これには、(1) 音声器官を正しく用いること、(2) 言葉の構造を理解することが関係する。	丁寧に発音すれば、人々はあなたの言う事柄を理解できる。言葉をはっきり述べれば、人々は大抵、真剣に受け止める。	一つ一つの語をはっきりと述べ、また読む。つまり、正しく発音し、十分な声量と適度な速さで行なう。聞き手に意味が明確に伝わらなくなるほど幾つかの表現をまとめて口早に言ったり、語句をつなげて発音したりしない。頭を上げ、口を十分に開けて話す。首、あご、唇、顔の筋肉、喉の筋肉をほぐす練習をする。
第3課	正しい発音	個々の語を正しく言う。これには、(1) 言葉を声に出す際、適正な音を用いること、(2) 適正な音節にアクセントを置くこと、(3) 幾つかの言語では、発音区別符号にふさわしい注意を払うことが関係する。	発音が適切なら、宣べ伝える音信の品位は高まる。聴き手の注意はおきり、発音の間違いにではなく、わたしたちの宣べ伝える音信に向けられる。	(改善方法) 辞書の活用の仕方を学ぶ。読み方の上手な人に、聴いてもらい、助言してもらい。良い話し手の発音に注意し、自分の発音と比較する。
第4課	流ちょうさ	言葉や考えがよどみなく流れるように朗読し、話す。流ちょうであれば、言葉がきこくしくしたり、まだるい感じになったりすることなく、何度もつかえたり、どう言おうかと手を取つたりする	話し手が流ちょうさに欠けると、聴き手の注意は散漫になりがちで、間違えた考えが伝わる場合もある。述べる事柄には説得力がなくなる。	雑誌や書籍を読みながら、新しい語にしるしを付け、その正確な意味を知ったうえでその語を使う。毎日、少なくとも5分ないし10分、声を出して読む練習をする。割り当てられた朗読を徹底的に準備する。考えを伝える語群に特別の注意を払う。考えの流れに精通する。日常会話では、まず考え、それから文全体を中断せずに言うように心掛ける。
第5課	ふさわしい休止	話しながら、ふさわしい箇所まできちんと停止する。時には、ごく短い休止を入れるか、瞬間的に声を弱めるだけでもよい。休止は、価値ある目的に役立っていれば、ふさわしいと言える	正しい休止の仕方は、理解しやすいのために重要な要素。休止によって、重要な点を際立たせることもできる。	声に出して読むとき、句切り符号に特に注意を払う。十分資格ある話し手に注意深く耳を傾け、どこでどの程度休止するかを観察する。ぜひ覚えてほしいと思う事柄を言ったあと、休止して、聴き手の心に染み込ませようとする。会話では、考えを言い表わす相手に促し、その人の言うことに耳を傾ける。最後まで話してもらい、遮らない。
第6課	正しく意味を強調す	語句を強調して、自分が言い表わす考えを聴き手が把握しやすいようにする。	話し手は、正しく意味を強調することによって、聴衆の注意を引きつけ、説得することも意欲を高めることもできる。	(技術を伸ばす方法) 文中のかぎとなる語や句を見分ける練習をする。文脈に基づいてこれを行なうことに特に注意を払う。(1) 考えの変化を示す強調と、(2) 述べている事柄に対する自分の感じ方を示す強調を用いる。聖句を読むときには、その聖句を引く直接の理由となる語句をいっつも強調する。
第7課	主要な考えを強調する	朗読するとき、単に個々の文の主要な考えを強調するだけでなく、読んでいる資料全体の主要な考えを特に強調する。	主要な考えを強調すれば、伝える音信は記憶しやすくなる。	(覚えておくべき点) 内容が発展してゆく中心となる主要な考えを見分けるために、印刷された資料を分析する。それらの箇所にしるしを付ける。声に出して読む際、それらの主要な考えを際立たせるために、熱意を増す、テンポを遅くする、深い感情を表わすなど、ふさわしい方法を用いる。
第8課	適度な声量	十分に大きな、あるいは十分に力強い声で話す。どれほど適度かを判断する際、(1) 聴衆の規模と構成、(2) 気を散らす騒音、(3) 話の内容、(4) 話の目標を考慮する。	話し手の声が容易に聞き取れなければ、人々の思いはさまじい、提供される情報は明確に伝わらない。話す声が大きすぎると、聞く人はいらだたく感じ、無作法とさえ思うかもしれない。	(声量を増す必要がある時) 大勢の人の注意を引いておきたいとき、気を散らすものに対処したいとき、非常に重要な事柄を伝えて、注意を喚起したいとき。行動へと鼓舞したいとき。個人あるいは人々の注意を引きたいとき。
第9課	抑揚	声の響きをいろいろ変える。この課では、声の大きさ、速さ、高さの変化について考える。	適切な抑揚は、話に生氣を与え、感情を呼び起こし、行動する意欲を抱かせる。抑揚をつけないと、話し手は論題に真の関心を抱いていないという印象を与える。	(改善方法) 自分が話す相手の人々の反応をよく観察する。心地よく聞こえる、適切な声量を用いる。呼吸するとき、肺の下のほうに息を十分に吸い込むようにする。
第10課	熱意	述べる事柄の価値に対する自分の強い気持ちを、生き生きとした話し方によって示す。	話し手が熱意を表わせば、聴き手は関心を保ちやすくなる。また、聴き手を行動へと奮い立たせることもできる。あなたが自分の述べる事柄に熱意を持てば、聴衆も熱意を抱く。	声量を調節する。緊急な命令、強い確信、あるいは糾弾を述べるときに行なう。話のどこで声量を増す必要があるかを注意深く考える。速さを変化させる。速さを変化させる。速さについては速く話し、重要な論議や要点についてはゆっくり話す。興奮を伝えるには、速く話す。声の高さをいろいろ変える。種々の感情を伝え、心に響くようにするために、ふさわしい箇所で行なう。声調言語では、声の高低差を広げたり狭めたりする。抑揚は、話の資料を選ぶところから始まる。
第11課	温かきと気持ちをこめる	自分の抱く感情を反映した話し方、また述べる内容と調和した話し方を手や肩、あるいは体全体の動きによって、考え、心情、態度などを表明する。目や口で、また顔の向きを変え、ことなどによって、話す言葉の効果を高め、気持ちを伝える。	聴いている人たちの心を動かすために、この特質は欠かせない。	(この特質を伸ばす方法) 提供される情報を準備するだけでなく、心の準備もする。そのようにして感情がこもるようになる。取り上げるそれぞれの点の点のように感じられるかを注意深く考える。特に熱意を示す必要のある箇所を見定める。生氣に満ちた話し方をする。気持ちを必ず顔にも表わす。力強く、元氣よく話す。
第12課	身ぶりや顔の表情	話をするとき、心、態度などを表明する。目や口で、また顔の向きを変え、ことなどによって、話す言葉の効果を高め、気持ちを伝える。	身ぶりや顔の表情によって、話に視覚や感情の面からも強調感が加わる。それが気持ちを高揚させ、声も活気を帯びてくる。	自分の用いる言葉に過度に気を遣うのではなく、聴き手を助けたいとひとす願う。内容に適した感情であれば、それを声の調子にも顔の表情にも反映させる。表現力豊かに話す人を注意深く観察して学(覚えておくべき点) 最も効果的なのは、自分の内面から出た身ぶりや顔の表情。他の人を観察する。しかし細かい点までまねようとはしない。話の資料を十分理解できるまで研究する。資料を味わい、思い描いてから、自分の声、手、顔などでそれを表現する。
第13課	視覚による接触	話を聴いている人々を見る。少しのあいだ視線を合わせるだけでなく、好ましく思われているなら、そうする。単に一群の人々ではなく、個々の人に目を留める。	多くの文化圏で、目による接触は、自分の話しかける人に関心を抱いているしるしとみなされる。また、確信を持って話している証拠ともみなされる。	(覚えておくべき点) 自然に、親しみ深く、話しかける相手に純粋の関心を抱くこと。朗読するときには、資料を手を持ち、あごを上げて、頭ではなく目だけ動かさず眺めるようにする。
第14課	自然さ	自分らしくある一會話的、誠実、気取らない。	自分を意識しすぎず、話すとくに緊張したり、硬くなった、きこなくなったりすると、述べる事柄から聴く人の注意をそらしてしまうかもしれない。	普段のとおりに話す。自分のことを考えるのではなく、エホバのこと、また人々はエホバについて学ぶ必要があるといふことを集中する。話を準備する時、正確な言い回しではなく、主として考えに注意を払う。講話でも日常会話でも、どんなに話の癖を避ける。また、話の種々の特質を、自分に注意を引くかたちで用いようとする傾向を避ける。公の朗読をよく準備する。気持ちをこめ、意味をはっきり(自分の身なをチェックする)すべてが清潔か。慎重と分別が表われているか。すべてよく整っているか。髪はきちんとしているか。世を愛しているように見えるところはないか。この身なりにつまずく人がいるかもしれない、と考えるべき理由が何かあるだろうか。
第15課	整った身なり	きちんとした、清潔な、慎み深い服装をする。髪をきちんと整える。姿勢も、よく気を配っていることを反映したものにす。	あなたの身なりは、クリスチャンとしてのあなたの信条や生き方を他の人がどう見るかに影響することがある。	よく準備する。話を声に出して練習する。折りのうちに『自分の重荷をエホバにゆだねる』。一詩 55:22。野外奉仕に定期的に参加し、集会で頻繁に注解し、この学校で急ぎよく割り当てられる話も進んで引き受ける。冷静さの欠けている兆候を見分け、その問題を防いだり制御したりする方法を学ぶ。
第16課	落ち着き	立っているときや、動くときや、話すとき、冷静さを物語る穏やかで品位のある姿勢を保つ。	話し手が落ち着いていれば、聴衆は、話し手よりも話されている事柄に注意を集中できるようにする。	マイクは口から10センチほど離す。必ず口をマイクの方に向けてから話す。会話のときより少し大きく強い声で話す。せき払いをする必要があるなら、マイクから顔を離す。
第17課	マイクの使い方	集会で、音声を増幅するためにマイクが使用されているなら、それを正しく用いる。	話す事柄は、はっきり聞こえて初めて、他の人々の益となる。	(さらに熟達する方法) 聖書を毎日読む。良い計画を立てて個人研究を行なう。会衆の集会で注解するとき、聖句を含めるように心掛ける。質問を受けたら、あるいは何らかの状況に直面したら、答えたり決定したりする前に、必ず、『聖書は何と言っているだろうか』と自問する。ある問題について聖書が何と述べているかが分らない場合、当て推量で答えたり個人的な意見を述べたりしない。調べてきます、と言う。
第18課	聖書を使って答える	質問に答える際、聖書そのものを活用する。	わたしたちの使命は、「み言葉を宣べ伝える」こと。イエスは手本を示し、「[わたしは]独自の考えで話しているのではありません」と言われた。一テモ2:14, 10:14。	聖書から聖句を朗読するとき家の人とその聖句を見せる。あるいは聖家の人、自分の聖書を開いて目で追うよう勧める。会衆で話をするときには、聴衆に、かぎとなる聖句を見るよう直接勧め、必要な時間を与える。
第19課	聖書を使うように勧める	聖句が読まれるとき聖書中のその箇所を目で追うよう聴衆に勧める。	自分の目で見たと、とりわけ自分の聖書の中に見たものは、心に深い印象づけられる。	関心を呼び起こす方法を選ぶとき、聴衆がすでに何を知っているか、論題についてどう考えているかを考慮に入れる。一つ一つの聖句によって何を成し遂げべきかをしっかりと頭に入れておき、それを反映させた紹介のこぼす述べ。
第20課	聖句を効果的に紹介する	聖句を読む前に、聴き手の思いを整える。	聖句を効果的に紹介すると、聴衆は聖句が述べる事柄の真の意味を理解しやすくなる。	(強調の仕方を身につける方法) 読もうとするのの聖句に関しても、『これらの語にはどんな気持ちや感情がこもっているか。それをどのように伝えたいか』と自問。使おうと考えている聖句を分析。それぞれの聖句に関して、『この聖句はどんな目的に資するか。その目的を達成するためにどの語を強調する必要があるか』と自問。
第21課	聖句を適切に強調しながら読む	論旨を際立たせる語や表現を強調する。ふさわしく気持ちをこめて読む。	聖句にこもる力は、適切に強調して読むとき、十分に際立ったものとなる。	(この能力を伸ばす方法) 聖書を定期的に読む。『もみの塔』誌を注意深く研究し、会衆の集会のためによく準備する。使う聖句については、含まれる語の意味をはっきり知っておくようにする。聖句を注意深く読んで、何を述べているのかを正しく理解する。わたしたちクリスチャンの出版物で調査することを習慣にする。
第22課	聖句を正しく適用する	聖句の適用はすべて、文脈および聖書全体と調和したものにす。適用は、「忠実で思慮深い奴隷」が公表した説明と調和していなければなら	人に神の言葉を教えるのは厳粛な事柄。神のご意志は、人々が「真理の正確な知識」に至ること。(テモ2:3, 4) きのこからわたしたちには、神の言葉を正しく教える責任が生じる。	話を準備するときには、資料だけでなく、聴衆についても考える。真に聴衆の益となるように話す。実際の適用は、話の結びで述べるだけにどめてはならない。話のどこにおいてもそれが明らかであるようにする。証言の準備をするときには、区域の人々がどんなことを気にかけているかを考察する。証言をするときには、相手の述べることに耳を傾け、それに応じて自分の話す事柄を調整する。
第23課	実際の価値をはっきり示す	敬意があり親しい気持ちが伝わる言葉、すぐ理解できる言葉、話に変化を添える言葉、適切な活気や感情を反映する言葉を用いる。文法に沿って言葉を用いる。	それによって、伝えてい音信を大切にしていることが示され、人々に対する態度についても多くのことが明らかになる。それによって、あなたの述べた事柄に対する人の反応も違ってくる。	(改善方法) この学級の提案の中から、努力したいことを一つだけ選ぶ。それを1か月かそれ以上の間、目標にする。何か読む時にはその目標を念頭に置く。有能な話し手の話を聴くのも、それを念頭に置く。自分の話に取り入れたと思う表現をメモする。書き留めた個々の表現を一日か二日のうちに使ってみる。
第24課	言葉の選択	敬意があり親しい気持ちが伝わる言葉、すぐ理解できる言葉、話に変化を添える言葉、適切な活気や感情を反映する言葉を用いる。文法に沿って言葉を用いる。	一語一語を書き出した原稿ではなく、頭に入れるか書面にした筋書きで話す。	筋書きで話すことの益を銘記する。日常の会話でも、考えをよくまとめるから話す。筋書きで話すのに必要な自信をつけるため、エホバに祈り、会衆の集会で自由に参加することを習慣にする。筋書きを、一目見てすぐ読める簡潔なものにする。話す準備として、語句を暗記するのではなく、考えを思い出せる(自問) この話の目標は何だろうか。各要点とその目標の関係ははつきりしているだろうか。資料は、聴く人の必要を考慮に入れて選んだらうか。資料の配列に当たっては、脈絡のつかみにくい飛躍を避けて、ある考えから次の考えへと聴き手の思いが導かれるようにしたらうか。
第25課	筋書きの使用	一語一語を書き出した原稿ではなく、頭に入れるか書面にした筋書きで話す。	筋書きを準備することは、考えをよくまとめるのに役立つ。筋書きで話せば、会話的に、心から話せるようになる。	筋書きで話すことの益を銘記する。日常の会話でも、考えをよくまとめるから話す。筋書きで話すのに必要な自信をつけるため、エホバに祈り、会衆の集会で自由に参加することを習慣にする。筋書きを、一目見てすぐ読める簡潔なものにする。話す準備として、語句を暗記するのではなく、考えを思い出せる(自問) この話の目標は何だろうか。各要点とその目標の関係ははつきりしているだろうか。資料は、聴く人の必要を考慮に入れて選んだらうか。資料の配列に当たっては、脈絡のつかみにくい飛躍を避けて、ある考えから次の考えへと聴き手の思いが導かれるようにしたらうか。
第26課	資料に基づく論理的な発展	種々の考えが相互にどう関係しているか、また導く結論や達成したい目標とどう関係しているかがはっきり分かるように資料を配列する。	情報が論理的に提出されれば、聴く人にとっては、理解しやすく、受け入れやすく、記憶しやすくなる。	筋書きで話すことの益を銘記する。日常の会話でも、考えをよくまとめるから話す。筋書きで話すのに必要な自信をつけるため、エホバに祈り、会衆の集会で自由に参加することを習慣にする。筋書きを、一目見てすぐ読める簡潔なものにする。話す準備として、語句を暗記するのではなく、考えを思い出せる(自問) この話の目標は何だろうか。各要点とその目標の関係ははつきりしているだろうか。資料は、聴く人の必要を考慮に入れて選んだらうか。資料の配列に当たっては、脈絡のつかみにくい飛躍を避けて、ある考えから次の考えへと聴き手の思いが導かれるようにしたらうか。

No.	学科	必要	理由	方法
第27課	原稿に頼らずに話す	考えは注意深く準備するが、言葉の選択はその場で自然に行なうようにして話す。	原稿に頼らずに話すのは、聴く人の関心を引きつけ、意欲を起こさせる最も効果的な方法。	原稿に頼らない話し方の益を銘記する。話の内容を書き出す代わりに、簡潔な筋書きを作る。話すための準備として、頭の中で要点を一つ一つ復習する。言い回しに過度に気を遣うのではなく、考えを論理的に発展させることに重きを置く。
第28課	会話的な話	日常会話のようでありながら、聴衆によく合わせた話し方をする。	ふさわしい会話的なスタイルで話せば、聴く人はくつろいだ気分になり、述べられる事柄を受け入れやすくなる。	(特質を伸ばす方法) 話を聴く人たちに対する自分の見方から始める。それらの人を友と見るが、過度に砕けた態度を取らない。敬意をこめて接する。原稿に頼らずに話す。印刷された資料の言葉遣いをそのまま使うことは避ける。その考えを自分の言葉で述べる。文を短くし、話す速さをいろいろ変える。意思を伝わせたいという願いに意識を集中する。心から話す。重要なのは、他の人にどんな印象を与えるかではなく、伝える音信である。日常会話の質を向上させる。このページの提案を一度に一つずつ練習をする。話すときは、筋肉一喉、首、肩、全身一の緊張をほぐす。
第29課	声の質	だれかのまねをしてではなく、正しい呼吸法を取り入れ、緊張した筋肉をほぐすことにより、自分の声を改善する。	声の質が良いと、他の人はくつろいで、気持ちよく聴ける。声の質が良いと、意思の伝達に支障を来したし、話すほうも聴くほうもいらいる場合がある。	(改善方法) クリスチャン人格の様々な特質を培う。正しく呼吸して肺の下部に空気をいっぱい吸い込む練習をする。話すときは、筋肉一喉、首、肩、全身一の緊張をほぐす。
第30課	相手に対する関心	他の人の考えに配慮を払い、相手の福祉を気遣っている、ということをはっきり示す。	エホバの示してくださった愛に倣う方法の一つであり、これによって人の心を動かすこともできる。	他の人が話すときには耳を傾ける。考えや気持ち表明されたことに感謝する。その人の考え方をしっかりと理解するために質問する。話し終えてからもその人について考える。すぐに再び連絡を取る。その人の最も必要としている点を満たす聖書の真理を伝える。その人の助けになることをする。当面の必要と長期的な必要の両方を考慮する。
第31課	他の人に対する敬意	他の人に配慮を払い、相手を敬う。	敬意を示すことは、クリスチャンに求められていることの一つ。それによって良い雰囲気が生じ、人々は聖書から伝えられる事柄を受け入れやすくなる。	人々に対するエホバの見方を理解する。頭の権、年齢、権威などを認める。人それぞれの意見を尊重する。聴く人たちを理解する。
第32課	確信をこめて話す	自分の述べる事柄は真実であり、重要である、という十分の確信をこめて話す。	あなたの確信は、聴く人があなたの話す事柄を真剣に考え、それに基づいて行動するよう動かす。	論題に適した気持ちをこめて話す。確信のこもった言い方をする。資料を、はっきり理解して自分の言葉で表現できるようになるまで研究する。資料が真実であり、聴衆にとって価値があることを十分に確信していなければならない。
第33課	巧みに、しかし確固とした態度で	他の人の感情を不必要に害さないよう、何を、いつ、どのように言うかについて、思慮深さを示す。	巧みであれば、人々は偏見にとらわれずに、良いように耳を傾けようとするかもしれない。巧みさは、仲間のクリスチャンとの良い関係を築くことに役立つ。	説教するのではなく、会話を。述べようとする事柄が相手にどのように受け止められるかを慎重に考える。話す前に、今がそのために適切な時かどうかを考慮する。できるときには、誠実に褒める。異議が唱えられても、過度に反応しない。独善的な精神を避け、人を裁かない。
第34課	積極的で、人を築き上げる	消極的なことを長々と話すのではなく、状況の改善となる事柄や自信を持たせる事柄について話す。	人々は、愛のない世界で疲れていく。個人的に深刻な問題を抱えている人も多い。聖書の音信が正しく伝えられれば、心の正直な人は明るい見通しを持つようになる。	わたしたちに割り当てられた仕事は良いやり方を宣べ伝えることである、という点を銘記する。批判的でなく建設的であるようにする。話す相手に対する積極的な見方を養う。会話の際、自分の述べる事柄が相手にどう影響するかを考える。
第35課	強調のための繰り返し	聴衆に特に記憶してもらいたい点を何度か述べる。	繰り返しは、記憶の助けになり、また効果的であれば、主な考えを際立たせ、それをはっきり理解できるように聴衆に助けることができる。	(いつ行なえるか) 重要な点を述べた直後か、主な考えを十分に詳しく説明した後。会話や講話の結びの部分で。かぎとなる点を聴き手が把握しにくく感じているように思えた時。再訪問や聖書研究の場合、恐らく数日ないし数週の間隔を置いて幾度か。
第36課	主題に沿って発展させる	話全体にわたって主題に言及し、様々な方法で主題に基づいて詳しく説明する。	これによって話は統一がとれ、聴衆にとっていっそう理解しやすく記憶に残るものになる。	話を準備する際、要点とそれを裏づける細部は、主題に沿って話を発展させるのに本当に役立つものを選ぶ。話し方を練習するときには、どこでどのように主題を強調できるかを考える。筋書きの中でそのようにしたい箇所にしるしを付けるのがよいかもしれない。話している時にも、主題に含まれるかぎとなる語句や考えを時々繰り返す。
第37課	要点を際立たせる	要点に特別な注意が払われるように話の資料をまとめ、また話す。	記憶しやすくなり、黙想や適用を促すことになる。	要点を選定する前に、聴衆がその論題について何を知っているかを考慮し、どんな目標で話すかを決める。それらの要素を念頭に置いて資料をまとめる。証拠となる点や聖句その他の資料と、それらが支持する主な考えとの関連をはっきり示す。一つ一つの要点に注意を引く。その方法として、要点に番号を振ること、それぞれの要点を述べてから裏づけとなる事柄を話すこと、一つの点を詳しく論じたあとにその要点をもう一度述べるなどができる。
第38課	関心を起こさせる序論	冒頭の幾つかの文の中で、聴衆の注意を引き、また目標達成に直接結びつく、適切な事柄を述べる。	序論によって、人が耳を傾けるか、どれほど注意を払うかが決まる場合もある。	聴衆の中に行っている人々のこととその情況、関心、態度、また聴衆がその論題についてすでに知っている事柄—を考慮する。その論題に関し、聴衆にとって特に関心があり、価値があるのはどんな点かを見極める。
第39課	効果的な結論	聞いた事柄に基づいて行動するよう、聴衆を動かす言葉と結びの幾つかの文章で述べる。	結論として述べられた事柄は、多くの場合、最も長く記憶に残る。これは話全体の効果に影響を与える。	結論は、すでに提示した考えに直接関係のあるものとする。聴衆に、聞いた事柄に関して何をすべきかを示す。言う事柄と言い方によって、聞き手に意欲を起こさせる。
第40課	陳述の正確さ	伝える情報を事実と完全に一致したものとする。	正確に述べることは、あなたが共に奉仕する組織、またあなたの崇拝する神についての印象を好ましいものとする。	確信がないのに答えてしまおうとする気持ちを抑える。聖書の「健全な言葉の型」に基づいて注解する。自分の論題について調査する。統計資料、引用文、経験談が正確であるかどうかを確かめ、誇張せずに行用する。はっきり覚えていない細かな点を憶測で述べたりしない。
第41課	他の人にとって理解しやすい	自分の述べることの意味を他の人が容易に把握できるようなかたちで言い表す。	話の内容が理解しやすければ、聴衆が得る益も大きくなる。	分かりやすい言葉を使う。主な考えは短い文で述べる。幾つかの要点だけを強調する。聴衆のよく知らない用語を説明する。時間を割いて聖句を説明し、適用する。自分の示す模範が相手の人にとどう影響するかを考える。
第42課	聴衆にとって情報豊か	聴衆の思考を刺激するようなかたちで、また価値ある事柄を学んだと感じさせるようなかたちで知識を伝える。	人々のすでに知っている事柄しか話さず、また価値ある事柄を学んだと感じさせるようなかたちで知識を伝える。	取り上げる論題について聴衆がすでに知っている事柄を考慮する。情報を伝えるペースを加減する。よく知られている点は速く、比較的新しい点はゆっくり話す。事実を述べるだけであってはならない。その意味や価値について論じる。いつ、どこで、だれが、何を、どのように、なぜと問うことにより、自分の思考を刺激する。聖書に基づいて筋道立てて話すための時間を取る。聖書の特定の部分について詳しく述べる。比較や対比を活用する。資料の概略を簡潔に述べる。問題の解決や決定に際して、どのように割り当てられた論題に直接関係のある資料だけを用いる。割り当てられた話に、印刷された特定の資料を基として用いることが含まれているなら、他の情報源からではなく、その資料から要点やかぎとなる聖句を選択する。
第43課	割り当てられた資料を用いる	割り当てられた資料を中心に話を組み立てる。話の資料が指定されているなら、その資料の中から聖句や要点を選ぶ。	話を展開するために割り当てられた資料を用いるなら、忠実に思慮深い奴隷が糧を備えるために設けられている計画に敬意を払っていることになる。	割り当てられた論題に直接関係のある資料だけを用いる。割り当てられた話に、印刷された特定の資料を基として用いることが含まれているなら、他の情報源からではなく、その資料から要点やかぎとなる聖句を選択する。
第44課	質問を効果的に用いる	望む結果が得られるように質問を用いる。口頭で答えてもらう場合もあれば、頭の中で答えてもらう場合もある。何をどのように尋ねるかが、質問の効果に直接関係する。	効果的な質問をすれば、聴き手を話に加わるよう招くことができる。よく選んだ質問に答えてもらえば、教身手として活用できる情報も得られる。	会話を促すために、相手の人が本当に重要だと考えている事柄に関係のある質問を用いる。重要な考えを述べる前に、その考えを聞きたいと思わせる質問を用いるようにする。述べる事柄の根拠、提出する真理の正当性、それらが生活に及ぼす良い影響などを人々が理解できるように質問を用いる。研究が事実を復唱するだけでなく、学んでいる事柄に関する自分の気持ちを言い表わせるような質問を用いる。
第45課	教えるための例えや例	比喩表現、物語、実際の経験などを、教身手の目標の達成に役立つように用いる。	これら教える助けとなるものを正しく用いれば、話は充実し、人の生き方に影響を与え、教訓は記憶しやすいものとなる。用い方が正しくないと、価値ある教訓から注意をそらすことになりかねない。	(ふさわしい例えや例を得る方法) 聖書を定期的に読み、例えに目を留め、様々な例の価値について黙想する。周りの世界を観察するとき、頭の中で、人々の態度や行動を、自分が扱う話の論題と関連づける。効果的な例えや例のファイルを作る。読む資料、聞く話、個人的に観察する事柄の中から収集できる。将来使うためにためておく。
第46課	身近なものを題材にした例え	聴く人の行なっている活動や、聴衆がよく知っている物事とかかわりのある例えを使う。	身近なものを題材にした例えは、聴く人の共感を呼ぶ。	(この能力を伸ばす方法) 自分の言いたい事柄だけでなく、聴き手についても考えるよう心掛ける。身の回りのちょっとした事柄もよく観察する。良い例えで自分が使ったことのないものを毎週少なくとも一つ使うことを目標にする。
第47課	視覚に訴えるものを効果的に使う	絵や写真、地図や図表などを使って、教える重要な点をより鮮明にする。	視覚に訴えるものは、多くの場合、話す言葉よりも鮮明な、あるいは永続的な印象を与える。	(視覚に訴えるものとして効果的なものは…) 特別に強調する価値のある事柄を際立たせたり、明確にした。教えることを主要な目的としているもの。演壇上で使う場合、聴衆全員にはっきり見えるもの。
第48課	筋道立てて道理に訴える	聖句や例えや質問を論理的なかたちで、また聴く気持ちや考える意欲が高まるような仕方で用いる。	ぶつちらばうで独断的な言い方は、往々にして人の思いと心を閉ざす。筋道立てて道理に訴えれば、話し合いができて、後で考える材料を人に与え、後日また会話をすることも開かれる。説得力が大いに増し加わる。	話し合いの始め方を決める際、聴き手の背景や態度を考慮に入れる。相手が間違ったことを述べても、いらい異議を差しはさまない。確信をこめて話すか、こちらと同じく相手の人にも、何を信じるかを選ぶ自由であることを認める。質問にすぐ答えるのではなく、尋ねた人がその件について筋道立てて考えるのに役立つ他の質問や例えを用いる。聖句についていつも筋道立てて述べるようにする。かぎとなる表現を説明し、聖句の意味を文脈や他の聖句がどのように明らかにしているかを示し、その聖句がどう当てはまるかを示す例を用いる。
第49課	確かな論拠を示す	述べる事柄の裏づけとなる、納得のゆく証拠を挙げる。	聴き手は、話し手の述べた事柄が真実であると確信しなければ、それを信じたり、それに基づいて行動したりはしない。	単に主張するのではなく、重要な点を裏づける納得のゆく証拠を挙げる。論拠を聖書にしっかりと基づいたものにする。話の目的や聴衆の必要に合った補強証拠を用いる。
第50課	心を動かすための努力	論じられている事柄を人々がどう思っているかを考慮に入れる。神に近づく神の友となれる感情や動機を人々が育むよう助ける。	エホバに喜んでいただくために、人は神の言葉を自分の心にとっかかり植え付けるなければならない。	(改善方法) 真の愛を示す。何が聴き手の心にすでに影響を及ぼしているかを識別する。エホバの素晴らしい特質を強調する。聴き手が自分の動機をどのように分析して精錬したらよいかを理解できるよう助ける。
第51課	時間をきちんと守り、ふさわしく配分	制限時間内で話す。持ち時間を話の各部にふさわしく配分する。	教えるの要点それぞれに十分な時間を割り振る必要がある。集会を時間どおりに終えることは大切。	よく準備する。それも、じゅうぶん前から準備する。話の各部に適切な長さの時間を割り当て、それを守る。話を練習する。
第52課	効果的に説き勧める	納得させる論法により、あるいは信頼できる情報源からの忠告によって、人を行動へと鼓舞する。真剣な態度で話さなければならない。	効果的に説き勧めれば、聴く人は、エホバに祝福される生き方をするのがいかに急務であるかを銘記できる。	愛と辛抱強さを示し、真剣に話す。神の言葉にしっかりと基づいて説き勧める。説き勧めることを自分の良い手本によって裏打する。
第53課	聴衆を励まし、強める	聴衆に希望や勇気を与える。聴く人を元気づけ、強める。	人々は世から大きな圧力を受けている。気落ちしている人も少なくない。話し手が何を、どのように言うかは、聴衆に大きな影響を及ぼす。	話を準備する際、聴衆の中の人々が直面している問題を思い起こす。どうすればその人々を励まし、強めることができるか、注意深く考慮する。神の言葉を活用する。その述べる事柄がわたしたちの直面している状況とどのように関係するかを示す。誠実な気持ちで話す。